

# 戯曲『小市民』における 《葛藤》について

松 本 忠 司

戯曲『小市民』の初演は1902年3月26日、ペテルブルクで、モスクワ芸術座によって行なわれた。この戯曲の上演に関連して、スタニスラフスキイは次のように回想している。「高揚と生起しつつある革命とが、劇場の舞台の上に、社会的政治的気分、不満、抗議を、そして大胆に真理を語る主人公についての希求を反映した一連の戯曲をもたらした。<sup>(1)</sup>」

ツァーリ政府にとっては、ゴーリキイの劇作家としての登場、彼の戯曲の舞台化はとくに深刻に憂慮すべき事態であった。政府はすでに、ゴーリキイの反政府的活動に対して一連の措置を講じてきた——作家を一度ならず逮捕し、その作品に発禁もしくは大幅の削除の処置を命じ、ときには彼の作品の掲載誌を閉鎖処分<sup>(1)</sup>に付した。これらの措置も作家の活動と社会への影響力を弱めることには、なんらの効果も果たしえなかった。ゴーリキイに対する弾圧は、革命的労働者や知識人の先進的部分をゴーリキイのまわりにいっそう緊密に結集させたにすぎなかった。ゴーリキイの発言は革命的大衆の声となり、その見解の表明となった。そのゴーリキイが、活字を媒体としてではなく、人間の肉声を通して舞台から、自分の思想を、主張を、見解を観客に直接的に訴えかけるというのである。演劇検閲委員会は、ゴーリキイの戯曲に対して、出版事業検閲委員会よりもさらにいっそう厳しい態度でのぞまなければならなかった。こうして、『小市民』の上演台本は、出版にさいしては

\* 本稿は、本誌第48輯所収の拙稿「劇作家ゴーリキイの出発」を前提としている。戯曲『小市民』の執筆過程および当時の社会的背景については前稿を参照されよ。

(1) К. С. Станиславский. Моя жизнь в искусстве. Изд. 8. М.-Л., «Искусство», 1948, с. 339.

検閲が手を触れなかった部分さえ、新たに削除の斧が振るわれ、満身創痍の観を呈した。だが、それにもかかわらず、戯曲の本質的革命性を抹殺することはいかに不可能であった。

権力側の危惧は的中した。『小市民』ばかりでなく、第一次革命期におけるゴーリキイのすべての戯曲は、上演の度ごとに、ツァーリ政府に反対の意思を表明するデモンストレーションをよび起こすことになった。

ふたたびスタニスラフスキイの回想によれば——「総稽古（戯曲『小市民』の、——引用者）には……ペテルブルクの《政府関係者》すべてがやってきた。大公たちと大臣たちに始まって、ありとあらゆる種類の官吏たち、検閲委員会の全員、警察権力の代表者たち、ほかの役所の上司たちが夫人と家族を伴って。劇場自体とその周辺には警察の特別警備命令が出され、劇場の前の広場には騎馬憲兵が詰めかけた。総稽古のためにではなく、総決戦のための備えと<sup>(2)</sup>考えていいほどだった。」

《総決戦》は、ときには言葉のあやだけにとどまらなかった。そのような衝突の一つについて《イスクラ》1903年35号（3月1日）は、ペロストークからの通信として次のように伝えていた。「……『小市民』が上演された劇場では巨大なデモンストレーションがあった。喚声がおこった——《専制政治、専横打倒、メトレンコ（警察本部長）打倒、自由万歳！》 同じ内容の文字を書いた紙が投げられた。劇場の中で警官が抜身の剣を振って、手当たり次第に殴り始めた。搦み合いが起こった。劇場内には叫喚、騒音、数人の観客が失神した。このために演技は終えられなかった。そのあとで街頭デモに移った。たいへんな興奮であった。野獣化した警官が発砲を始めた。警察本部長が拳銃を握って、怒り狂った獣のように、町じゅうを走りまわった。軍隊が呼び寄せられ、商店はすべて閉鎖された（午後六時に）。一人の労働者が殺された、負傷者もいる。三十人が逮捕された。労働者、中学生、商業学校生徒。この野獣行為に憤慨した学生青年は精力的に抗議していた。

(2) Там же. с. 343.

概してデモンストレーションは巨大な教育的意義を有した。《公衆》は、乱暴な警察の専横が何をもたらずかをその眼で確かめた。デモンストレーションは四時間つづき、ほとんどすべての街路を捲きこんだ。市内の興奮は巨大である。すべての工場から棒で武装した労働者たちが集合し始めた。こうしたすべてが2月15日に発生したのである。<sup>(3)</sup>」

このように、第一次革命前夜、この戯曲の上演はししば直接的な階級戦の様相を帯びる反応を惹き起こし、権力者たちの危惧を完全に裏書きするものとなって、彼らに大きな衝撃を与えたのであった。

初演とほとんど同時に、『小市民』は単行本で刊行された（1902年3月12日）。そしてこの戯曲に関する数多くの批評が現われ、その主題について、主人公について激しい論争が展開された。しかし、これらの批評の中にはこの戯曲の世界を、題名どおりに（戯曲の最初の題名——『小市民。ベッセミーノフ家における悶着』（«Мещане. Сцены в доме Бессеменовых»））、小市民社会内部に限定し、この社会層における《父と子》の断絶・対立をえがく家庭劇・風俗劇として意味づける見解が多く現われた。首都の大雑誌《ルースコエ・ボガーツトヴォ》の主宰者で、自由主義的ナロードニキの指導的理論家、エヌ・カ・ミハイロフスキイは、この戯曲がオストロフスキイ流の商人的《闇の王国》の変種であるとする伝統説を唱え、「原理としての小市民性に対して、さまざまな角度から、それ自体としてはなんらの共通性のないさまざまなものが対置されうる——《スペイン貴族》好みの《ヒロイズム》も、ありとあらゆる他のヒロイズムも、《市民的》感情と偉業も、きわめて控えめな若い魂の激情も、デカダン主義からサディズムとレスビアンの愛までのありとあらゆる畸型も、宗教的熱中も、ゴーリキイ氏の熱愛する酔いどれの浮浪人性も、ヘロストラートスとネロの狂気も、ただもう自由な芸術家の生活も、その他あれもこれも——一言で言って、月並みな平凡事と灰色の伝統的枠に納まりきれないすべてである<sup>(4)</sup>」と書き、ゴーリキイの戯

(3) «Искра», 1903, № 35.

(4) «Русское богатство», 1902, № 4. отд. II, с. 59.

曲の革新性を否定し、戯曲においては小市民性の明確な認識さえ与えられていないとの見解を表明した。

保守派の批評家、イ・エヌ・イグナートフは、戯曲における主要な葛藤をベッセミョーノフ家の新旧両世代の衝突としてとらえ、その新しい世代にピョートル、タチヤーナばかりでなく、ニール、ポーリャをも含めた上で、作者が両方の世代を非難している、と主張した。「ゴーリキイ氏は検事だ、情熱的で峻厳な検事である。おまえたちが悪いのだ——と、親たちに対しても、子供たちに対しても彼は言う。〈……〉おまえたちは無気力で、小市民的にみすぼらしい。生活に対するこの無気力と小市民的吝嗇とによっておまえたちの不幸のすべてが説明されるのだ、と。」<sup>(5)</sup>

戯曲『小市民』を《父と子》のドラマとして見る見解は、保守派や自由主義派の批評家たちの多くに共通していたばかりでなく、その当初においてはマルクス主義文芸学者たちのあいだでさえ優勢であって、この戯曲の理解に少なからぬ誤解と混乱を持ちこんでいた。ヴェ・ヴェ・ヴォロフスキイは論文『闇の王国における分裂』の中で、ニールを「崩壊しつつある小市民層の左翼」、「血のつながるグループとのすべての関係を引き裂く離反者」と性格づけ、「だが、彼の見解と判断について語ることはまず不可能である。もし彼がそのような考えをもっているとしても、それは単にもっとも不完全な、非典型的な形において所有しているのだ。」<sup>(6)</sup>と述べた。ア・ヴェ・ルナチャールスキイも戯曲『別荘の人びと』に関する論文(1905年)の中で『小市民』に触れながら、次のように書いた。「ベッセミョーノフの父たちは途方に暮れ、驚愕し、子供たちの気分と希求が理解できないけれども、彼らに席を与えることによって譲歩した。ベッセミョーノフの子たちは、それぞれに異なる旗のもとに生活の中へと進んで行く。彼らの相貌は戯曲そのものの進行につれて次第に明らかとなる。ピョートルは、新しい小市民精神の右翼

(5) «Русские ведомости», 1902, № 98, 9 апреля.

(6) В. В. Воровский. Литературно-критические статьи. М., ГИХЛ. 1956, с. 81.

であり、当初においては全般的な変革、抗議、改造に惹きつけられるが、やがて広汎な社会的改革の事業によせる熱意が急速に冷めてしまう。〈……〉若い小市民精神の左翼は、生活歓喜的な、自己に確信を抱くニールである。彼はベッセミョーノフの実子ではない、その養い子であり、彼の労働の果実は、長いあいだ、善行のよそおいのもとに搾取されるところとなっていた。巨大産業の成長は、ニールに対して熟練労働者としての独立的地位を与えた。そして彼は誇らかに生活の中へ進み入り、自分の要求を誇らかに提示し、ベッセミョーノフの世界に変化をひき起こすことを望む。それは、ピョートルが夢みた変化よりも、限りなく深いものである……<sup>(7)</sup>」

後年においては、ヴォロフスキイとルナチャールスキイは、この戯曲の主題および主人公についての正しい見解を示すことになるが、第一次革命以前の時点においては、これを小市民層の世代間の葛藤としてとらえ、しかもニールの積極性を高く評価しながらも、彼をピョートルと同列に並べるといふ誤解を脱することはできなかった。この誤解の第一の理由は、ほかでもない小市民（мещане）の術語自体についての認識にかかわるものであった。

前稿において指摘されたように、小市民層（мещанство）という単語は、もともと都市住民のうち、貴族、聖職者、大商人（купец）を除く広汎な階層を包括する身分呼称であった。小所有者、小経営者、下級官吏、職人層、知的職業人など、多種多様の職業に従事する人びと、教養と資産水準の極端に差のある人びとが押しなべてこの身分に属していた。それは、わが国の江戸時代における町人身分の概念に近い。そのかぎりでは、ベッセミョーノフの養い子である機関士ニールもまた戸籍上、塗装職の同業組合員（цеховой）の家族としてこの身分に属しているだろう。（ゴーリキイ自身が職業組合員として戸籍に記載されていた。）しかし、この言葉は同時に、この階層の性格的特徴であるところの、社会的視野の狭小さ、経済的不安定、打算的生活

(7) А. В. Луначарский. Собрание сочинений в 8 томах. М., ГИХЛ. 1963-1967, т. 2, с. 7-8.

感覚によって小市民性＝俗物根性の意味で使われるようになった。ゴーリキイがこの戯曲の題名を、最終的に『小市民』とし、『ベッセミョーノフ家における悶着』という副題を削り落としたことには、問題の本質がベッセミョーノフ家、つまり小市民の内部にあるのではなく、ロシア社会全体に瀰漫する小市民的俗物的イデオロギーと、これに対置されるべき新しいイデオロギー、新しい人間のイデオロギーとの葛藤にあるという理解が裏打ちされていたのである。

たしかに戯曲は、典型的な小市民の家庭を提示し、その階級的的思想の本質を暴露し、それを摘発している。しかし、ゴーリキイの課題は、この家庭における《父と子》の問題その他、あれこれの小市民社会内部の諸問題の解明に限定されるのではないし、またそれらの諸問題を解決するエネルギーの出現を小市民の内部に期待することでもなかった。ベッセミョーノフ老人はいみじくも指摘している——「ニールだ！ なにもかもニールのせいだ……」<sup>(8)</sup>と。この指摘によって、ほかの誰でもなくニールこそが、戯曲の基本的葛藤の端緒であること、すべての矛盾を発展させる原動力であること、すべての登場人物の思考、会話、論争の中心の対象であることが正しく意味づけられている。しかし、それでもなお、ベッセミョーノフ老人のニールに対する憎悪と怒りの動機を、純粹に個人的な、家庭的なもつれの中に見ることも可能であるかも知れない。戯曲の筋的展開の中では、一見したところ、いわゆる《ラブ・ストーリー》が比較的大きな比重を占めているように思われよう。《養い子》のニールが《養い親》であるベッセミョーノフ老人の意思にそむき、彼の許可を得ずに、貧しいお針子のポーリャと結婚することを決心した。ニールに思慕を寄せていた彼の実の娘タチャーナは、失恋の悲哀に打ちのめされて自殺を計った。息子のピョートルは、大学を放校されたうえ、間借人である未亡人のところに通いつめているが、ここにもニールの影響が感

(8) М. Горький, Полное собрание сочинений. Художественные произведения в 25 томах. М., Изд. «Наука», 1968-, т. 7. с. 93.

(以下、同書よりの引用は、該当箇所のページを引用文のあとに付記する。)

じられなくもない。しかし、これらの《ラブ・ストーリー》は、ドラマを活発化させ、登場人物相互の人間関係と諸事件に活気を与えるが、あくまで補助的役割を担っているにすぎない。ベッセミョーノフとニールの衝突は、《ラブ・ストーリー》の介在なしでも発生したであろう。それは両者の拠って立つ思想の根元における深い衝突であった。

《小市民》の用語は、ゴーリキイにおいては単に社会的身分呼称の枠として理解されているのではなく、資本主義制度の社会におけるすべての所有者的諸階級をつらぬく思想として把握されていた。1905年の論文『小市民層についての覚書』の巻頭で、彼は次のように述べている。「小市民性は支配的な諸階級の現代の代表者たちの精神の構成である。小市民性の基調をなすのは、畸型的にまで発達した所有の感情、自己の内外の平安に対する張りつめた欲望、この平安をあれこれと乱すおそれのあるすべてのものに対する暗い恐怖心、うちたてられた魂の平衡を動揺させ、生活と人びとに対する慣習的な見解を破るような一切のものを、出来るだけ速やかに自分自身に説明しようとする執拗な努力である。」<sup>(9)</sup>（傍点引用者）

この世界の中に、長年にわたり搾取にしいたげられていたニールが、労働によって鍛えられ、労働者の階級的連帯によって培われた世界観を担って登場するのである。彼の発言と行動とを基軸として展開される《小市民》批判は、十九世紀文学において重要な意義をもつ主題となり得た《小市民性＝俗物根性》一般の批判にとどまらず、二十世紀初頭におけるロシヤの、人民覚醒の時代の緊急かつ具体的な歴史的課題と緊密に結合した批判とならなければならなかった。

ふたたび『小市民層についての覚書』を引用しよう。論文の最後の部分で、ゴーリキイは、小市民が「哀れな存在物」であるとしながら、これに徹底的な批判をくだす必要を強調して書いている。「……生活の本当の敵は、盲目的で愚鈍な、意思をもたぬ力たる資本そのものではなくて、自己の個人

(9) М. Горький. Собрание сочинений в 30 томах. Гослитиздат. М., 1948-1955, том 23, с. 341.

的な幸福の利益のために、人民大衆に向かって生活の他の秩序が不可能だと証明し、労働者とその雇主の収入項目としての役割に満足させ、少数者による多数者の奴隷化という事実の上に打ち立てられた生活を正当づけようとする資本の走狗たる、尊敬すべき小市民たちであるということを、つねに自分の名前のようにはっきり理解しておかねばならないのである。」「われわれの時代はただに闘争の時代であるばかりでなく、裁きの時代でもある。真理、自由、名誉をもとめるあらゆる働き手たちが、ただ一つの不敗の国民軍に結合すべき時であるばかりでなく、ようやく最近になってプロレタリアートの軍隊の後について歩くようになり、その軍隊が勝利を収めたとなると、初めて前に駆けだしていき、《われわれが勝ったのだ！ われわれが人民の代表者だ！ どうか諸君と取り引きをするために、われわれに坐ることのできる席を与えたまえ。われわれは、ロシヤの労働人民を売り渡しもしよう——いくら払ってくれるかね？》——と叫ぶあらゆる徒輩と袂別すべき時である。<sup>(10)</sup>」

ゴーリキイの《小市民性》批判は、まさにこのような観点から、「生活の本当の敵」に対して向けられたものであって、それは所有者的強欲ばかりでなく、社会的闘争の中立的調停者をよそおう退嬰と無活動の説教や、革命的空文句と一時だけのヒロイズムの仮装によって進歩派を詐称する、あらゆる色合いの利己主義的思想に対する闘いを意味していた。

戯曲『小市民』の舞台は、典型的な小市民、塗装職同業組合長の家庭に設定されている。家長のワシーリイ・ベッセミョーノフの生活的関心は、何よりもまず財産の保持と蓄積にある。彼は、家計の検約についてたえず気を配り、一コペイカでも多い収入について思案をめぐらす。こうした彼の志向は彼を中心とするさまざまな生活的波紋をかきたてる原因ともなりうる。たとえば、彼と同様の吝嗇漢、商人シゾーフに対する塗装代金十七ルーブリ請求にかかわる訴訟事件、実子のピョートル、タチャーナ、それに養い子ニール

(10) Там же. с. 367.

の三人を結婚させることによって、老人自身にとって有利な条件を獲得するという願望（ニールについては、彼を一万ルーブリの持参金付きの《バカ女のセドーヴァ》と結婚させようという具体的企画がすでにある）、社会的名誉という以上に、蓄財に有利な条件をもたらすであろう手工業管理所会頭の椅子をめぐる商人ドセーキンとの抗争等々——これらはそれぞれに、戯曲の中心的葛藤としての発条になりうるし、筋的展開の基軸にもなり得たろう。オストロフスキイ劇の多くは、まさにそのようなドラマであった。

しかし、ゴーリキイは、このような葛藤の素因を、たんにベッセミョーノフの性格描写に利用するだけにとどめ、戯曲における葛藤の起因としては用いなかった。（シゾーフ、セドーヴァ、ドセーキンは舞台には姿を現わすことがない。）戯曲ではまったく別の発条が作用する。それは、財産の保持への志向とからみ合うところの、子供たちの将来についての憂慮である。彼にとって不安となるのは、子供たちが《成功しなかった》ということではなく、時代が悪いということである。この関係において第一幕のベッセミョーノフとタチャーナの対話は重要な意味をもつ。ここでは老人のいつもの、余分な出費に対する嘆きから始まり、それを聞くタチャーナが顔をしかめるに至り、ドラマの背景を明確に規定する発言となる。

ベッセミョーノフ いったい、父親の言葉をそんなに辛そうに聞くものかい？ 自分のためじゃなく、おまえたち、若い者のために言っとるんじゃ。おしらは自分の分は生きおおした、おまえたちは——これからだ。だがな、おまえたちを見ていると、わからんのだ——まったく、おまえたちは、どんなふうに生きて行くつもりなのか？ おまえたちにはなんの目論見がある？ わしらの秩序はおまえらにゃ気に入らん。そのことはわしらにもわかる、感じているよ…… だが、自分のどんな秩序をおまえらは考えついたんじゃ？ そうだとも……

タチャーナ お父さん！ 何回、このことを言ったと思いますの？

ベッセミョーノフ まだまださ、終わりなしじゃ、棺に入るまで言うだろうて！ というのも——わしは生涯、心配なんじゃ、おまえたちの

ことで心配なんじゃ…… (14)

ここには、ベッセミョーノフの心にわだかまる重大な疑問がひびいている。子供たちがどんな生活秩序を欲しているのか？ 老人のもとには、子供たちを高等教育の場に《手放した》のは失敗だったということで、子供たちの《墮落》を説明する用意がある。しかし第二幕では、同じ質問をピョートルに向けたあとで（「おまえたちが一体、どういう人間なのか、理解したいのだ……どういう人間なのか、知りたいのじゃ」）、老人は重大な認知を行なう。「わしは心から……子供たちのことが心配だから……心が痛むから大きな声も出す……悪気があってのことじゃない。〈……〉わしは心配なんじゃ。時代がこんな……怖ろしい時代だ！ なにもかも壊れてひび割れて……生活が波立っている！」(37)

《怖ろしい時代》——ここにベッセミョーノフ老人の苦悩のすべての根源がある。そしてゴーリキイの中心的関心もまた、この《典型的な小市民》の強欲をあらわす実行行為であるよりも、その実行によって生み出され、そしてあらゆる所有者の存在基盤を脅やかす、すでに始まった歴史的転換に結びついて、新しい性格を帯びたその世界観に向けられている。ベッセミョーノフ老人は、あたかも遭難した船に乗り合わせた商人の立場に立たせられた。こうした瞬間には、たとえ彼がどんなに強欲だとしても、この場において有利な商取引を追求するよりは、まずもってわが身の安全を計る方策をさぐるだろう。もちろん、その場合でさえ、自分の重い財布と商品を海中に投棄することを決意するためには、ぎりぎりのどたん場まで彼は躊躇もしよう。財産もろとも助かるべく努力もしよう。しかし、その行為は彼の意思と性格の直接的表明であるよりも、むしろ彼の日常生活行動の隋性的な、非作為的な表明と見るべきであろう。ここでの彼の思考の主要な方向は、富の蓄積以上に、自分自身とともに、自分の努力の結晶である富を継承させるべき人びとを救出したいという願望に結びつくのである。

遭難の始まりに気づいたベッセミョーノフ老人の当面の課題は、さきに引用したゴーリキイの次の指摘に要約されるだろう。「……魂の平衡を動揺さ

せ、生活と人びとに対する慣習的な見解を破るような一切のものを、出来るだけ速やかに自分自身に説明しようとする執拗な努力である。<sup>(11)</sup>

ゴーリキイはさらに続けている。「しかし、小市民は、新しいもの、不明なものを理解しようとしてではなしに、人生の闘いにおける自分の受動的な立場を正当づけるというためにのみ説明するのである。」この段落の部分は、すでにベッセミョーノフ老人というよりもむしろ彼の子供たち——ピョートルとタチャーナに関係するものであろう。ベッセミョーノフの若い世代は、父親とはきわだって異なる側面をもっているのだが、それは彼らが小市民の世界へ「新しいもの、不明なもの」をもたらす方に内的に近いということではなく、父親たちよりもいっそう鋭く足もとの大地の揺れを感じ、いっそう執拗に精神の平静を回復しようとする事、つまり、「自分の受動的な立場を正当づける」という試みによるものである。ベッセミョーノフ老人にとっては、何かにおいて、誰かに対して、自分の立場を「正当づける」ことは課題になり得ないだろう。現在の富と社会的地位とを得るまでには、彼はたしかに数多くの罪を犯し、多くの人びとに犠牲を強いもしただろう。だが、彼が生きてきた社会において、彼の生きる権利の正当な行使の結果であったとするなら、罪は彼の側にあるのではない。彼の自己防衛は、既存の所有者的生活秩序を完全に是認するという前提に立った行動である。

ピョートルの問題はずっと複雑である。彼には既存の秩序を唯一絶対のものとする確信はない。彼にとっては、自分の小市民的・所有者的本質が露呈しないように、自分もまた公正の人、社会進歩の側に立つ人の範疇に属しているという外見をもつことが、《魂の平衡》状態を保つためにすでに不可欠となっている。彼はしばしば《父たち》の小市民的旧習、その狭量を軽蔑し、人間個性をはめこむ伝統的な鑄型を憎悪する。しかし、それは本質的な、非妥協の闘いを意味するものではない。「《欲する》と《せねばならぬ》とのあいだに立つ人間の魂を切りさいなむドラマには、誰も目を向けない」と、彼

(11) Там же. с. 341.

は嘆く。この嘆きは、彼の欲するものが本質的には父と同一のものではあるけれど、周囲の諸条件のもとでは、ほかの何かの覆いをかけた形で欲しなければならぬという認識から生じたのである。大学に学ぶ機会をもった人間としての彼の自尊心は、《父たち》の露骨な強欲に同調することを彼に許さないが、といて、新しい理念と新しい人びとの登場は、これが彼の生活基盤を根底から破壊しつくす力であることを感じさせて、彼を不安に駆りたてずにはおかない。いずれの側にも立ち得ない彼は、あらゆる集団の束縛を拒否する《個の自由》を渴望する。ピョートルの理解によれば、《個の自由》とは社会からの自由であり、個性は社会にきびしく対立し、市民的義務のイデア、社会奉仕のイデアに反対するものである。

「社会だって？ ぼくはそいつを憎んでいる！ それはたえず個性に対する要求をつり上げるけれど、個性が正常に、障害なしに発達する可能性は与えない…… 人間は何よりもまず市民でなければならぬ！——社会は、ぼくの仲間をとおして、ぼくにこう叫んだ。ぼくは市民になったさ…… チェッ、勝手にしたらいい…… ぼくは……いやなんだ……社会の要求に従う義務なんてない！ ぼくは個人だ！ 個は自由だ……」(25)

「ぼくは市民になったさ……」と、ピョートルは自嘲をこめて言う。これに対して、ベッセミョーノフ家の下宿人で、教会合唱団員チャーチェレフはすかさず指摘した——「……小市民、かつて市民だった……半時間の？」疑問符が付せられたことで、この皮肉は致命的な表現となる。つまり、もしかしたら、半時間でさえないのかも知れないのだ。

ピョートルは、法律学を学ぶために大学に進んだのであるが、学業なかばで反政府的な学生騒擾事件に関係したことで大学を追われた。しかし、彼にとって学生運動とは何であったのか、政府の抑圧と強制とをどれほどに実感しえたのか。ピョートルは言っている——「ついうっかりして、ぼくはあのバカげた興奮に捲き込まれてしまった！〈……〉ぼくがローマ法を研究するのを妨げるような、なんらの規則も、ぼくは感じなかった……ないとも！良心に照らして……ない、感じはしなかった！ ぼくは仲間の規則を感じて

……そして、これに屈した。この二年間が、ぼくの生涯から抹殺された……  
そうだよ！ これは強制だ！」「生きたいんだ——一人で、関係なしに……」  
「ぼくはただ自由でいたいのだ……」（25）　いま彼が欲する自由は、社会からの《自由》、社会的義務との、人民大衆の要求との《無関係》を保障する自由であり、これは小市民的急進主義の脱落者たちが迎える低落の基本的な道程の一つを示すものであった。

すでに脱落者の道を歩き始めているピョートルは、同じ年代の学生シーキンや女教師ツヴェターエヴァがいま——ピョートルの挫折後において——人民大衆への奉仕の理念を保持しながら、労働者や兵士たちのあいだで啓蒙的活動を進めていることに憎しみをおぼえ、それらの活動が《幻想》であり、《から騒ぎ》であると中傷せずにはいられない。「そんなものは——自己欺瞞だよ。明日になって将校か職長がやってきて、その連中のしゃっ面に一撃をくらわし、きみたちが注ぎこんだものを残らず——もし注ぎこめたとすればだけど——頭の中から叩き出してくれるだろうさ」（28）

小市民＝個人主義者の深刻なモラルの低落は、彼における祖国愛の感情の枯渇のうちにとりわけ明瞭にあらわれる。「……ぼくは思うのだが、フランス人あるいはイギリス人が——フランス！　イギリス！　というとき、彼はこの言葉の背後に、あるリアルなもの、感触しうるもの……彼の理解できるものをイメージに浮かべる……　だが、ロシヤ——とぼくが言う、すると、これはぼくにとってむなしい音だと感じる。」「われわれのロシヤで……　なんと奇妙にひびくことか！　はたしてロシヤが——われわれのもの？　ぼくの？　きみたちの？」（24）

唯一絶対の《個的自我》の自由を渴望しつつ、社会、祖国、人民をひとしく個性を圧迫するものとして斥けるピョートルの思想の中に、マックス・シュティルナーの影が感じ取られるのは偶然ではない。二十世紀の初頭、まさにゴーリキイの『小市民』執筆当時に、ロシヤのブルジョア的ないしプチ・ブル的インテリゲンツィヤの心を捉えていたのは、九十年代末のニーチェ流行につづくシュティルナーの《独我論》(Solipsismus)であった。1901年12

月、ゴーリキイはピャトニーツキイ宛の書簡の中で、最近刊行された雑誌《哲学と心理学の諸問題》第 59 輯を読んだことを伝え、とくにその中のシュティルナーに関するサヴォードニクの論文『四十年代のニーチェ主義者』に注目している。この論文の骨子は、社会と人民の自由は個の自由を代償として得られるものであり、社会は個性の自立的発達の妨げとなり、つねに個性に敵対的であり、《人類》や《人民》の概念は虚構であって、現実性(реальность)を有するのは《唯一者》である《自我》、個別的個性のみであり、この個性は社会、集団を偶像視することをやめねばならぬ、というものである。サヴォードニクは、シュティルナーの思想を次のように結論づけた。「人民は死滅せしめよ、個人が自由でありさえすれば。」<sup>(12)</sup> 同じ年に、エヌ・ベルジャーエフは、その著書『社会哲学における主観主義と個人主義』の中でシュティルナーを擁護し、「エム・シュティルナーが民主主義的アナーキズムの精神的父とみなされるのは、根拠がないわけではない。」<sup>(13)</sup> と述べていた。

後年、ゴーリキイは論文『変節者たちについて』(1930)の中で、シュティルナーの著作『唯一者とその所有』を「小市民的個人主義の福音書」と呼んだが、すでにピョートル・ベッセミョーノフの性格を形象するにあたって、その基本的特徴をシュティルナー的な極端な個人主義として捉えたのであった。しかし、ロシアの個別的特殊条件のもとでピョートルには異なる性格特徴も付与されている。ピョートルは、《社会》に対する関係においてアナキストではあるが、しかしシュティルナーにおけるような国家の否定を借用していない。なぜなら彼は、数年後の彼にとっては国家が障害になるどころか、父たちとはちがって《白い手のままに》行なう搾取の頼りとすべき後楯にもなりうることを知るであろうから。ピョートルの未来像について、ゴー

(12) В. Садовник. Ницшеанец сороковых годов. М. Штирнер и его философия эгоизма. «Вопросы философии и психологии», кн. IV(69) и V(60), Пб., 1901. Цит. по кн.: Б. В. Михайловский. Драматургия М. Горького. М., 1951, с. 23.

(13) Н. Бердяев. Субъективизм и индивидуализм в общественной философии. Пб., 1901. Цит. по кн.: там же. с. 24.

リキイは次のように述べている。「……彼は小市民になり、彼の父と同じような重箱の隅をほじくる人間になります。彼の父ほどには力強くもなく、仕事をする能力もないのだが、もっと賢明で、もっと狡猾になります。〈…〉戯曲の中での彼は不幸な青二才です。のちに、実生活の中では、みじめなペテン師に、才能のない三百代言に、市議員になるでしょう。こういった連中が真先になって提案して、市長閣下が無事便秘を快癒されたことに関連して、内務大臣に感謝電報を送ったりするのです。<sup>(14)</sup>」

ピョートルのベッセミョーノフ老人に対する、その小市民世界に対する《反乱》は、彼が父親の遺産を相続し、この社会においてなにがしかの地位と権力を分け与えられるまでの《売り込み》の姿勢でしかあり得なかった。だから老人が息子に向かって、「学生としてではなしに、人間としておまえを見たいのだ」と言うとき、ベッセミョーノフ家における《父》と《子》の葛藤は、時間の推移によって解消する過渡的な、非本質的葛藤にすぎないことが納得されるのである。

ピョートルの形象を通して明らかにされる若い世代における《小市民性》の諸特質は、彼の二つ違いの姉であるタチャーナの形象にも反映され、とくにその《受動性》において極限的な表現を見ることができる。この戯曲の発表当時、タチャーナとピョートルを《チェーホフ劇》の主人公たちと同列において視る批評が一般的であった。知識人の社会活動からの逃避、その無力感、その小市民的倦怠の泥沼への埋没——これらはチェーホフ劇の基調をなす主題であった。チェーホフは、こうした知識人層の存在的危機を鋭くえぐり出したが、彼の作品における知識人の悲哀は生活の犠牲として示し出されるのであった。そこには悪の積極的な担い手が登場することはほとんどなく、登場人物のすべてが、さまざまな陰影を帯びるにせよ、押しなべて生活の諸条件による犠牲として登場するのであった。そうした意味で、チェーホ

(14) M. Горький. Собр. соч. т. 23, с. 220-221. 邦訳：松本忠司編訳『ゴーリキイ文芸書簡Ⅰ』, 108 ページ。

フ自身がタチャーナとピョートルのなかに、自分の主人公たちとのある種の親近性を見たとしても、それは理解できないこともない。

1901年10月22日、『小市民』の草稿に眼を通したあと、チェーホフはゴーリキイに手紙を送ったが、そのなかで次のように書いている。「彼〔ニール〕をピョートルとタチャーナとに対置させぬこと、彼は彼で別のもの、また彼らは彼らで別のもの、みんな素晴らしいすぐれた人びとで、たがいに独立しています。〈……〉ピョートルはよろしい。どんなに彼がいいか、あなたもおそらく疑いはなさるまい。タチャーナもまた完成された人物です。ただ必要なことは、第一に、彼女が実際に女教師であってくれること、子供たちを教えたり、学校から帰ったり、教科書や手帳をいじったりすること。<sup>(15)</sup>」

しかし、ゴーリキイはタチャーナの形象に手を加えなかった。タチャーナは、「実際に女教師で」あることはできない。彼女にとって《教師》の仕事はどんな意味をもつものであったのか。彼女の同僚であるツヴェターエヴァの場合には、彼女の学校内での教育活動は描かれていないとしても、労働者や兵士たちの文化サークルの仕事を通じて、教師としての社会生活へのかかわりがはっきり浮かび上がるのだが、タチャーナには一般に教育活動の片鱗もうかがわれぬ。タチャーナにとっては、《教師》の仕事は彼女の教養の水準を保証する社会的な肩書きでしかなかった。戯曲の全編を通じて、《教師》という単語が彼女の口から発せられるのは一度だけ、しかも次のような形においてである。

タチャーナ　きのう、わたしはクラブへ行ったの……家族の夕べに。市参事会員で、うちの学校の理事でもあるソーモフが、わたしにちらっとだけ会釈したわ……そうよ。ところが、広間にロマーノフ判事のお妾が入ってきたら、あの人、彼女のそばにすっ飛んで行って、県知事夫人にでもするように、最敬礼なのよ、手に接吻なんかしたりして……

(15) А. П. Чехов. Собрание сочинений в 12 томах. М., 1964. «Худ. лит.», т. 12, с. 417-418.

アクリーナ・イヴァーノヴナ まあ、なんて恥知らずな！〈……〉

タチャーナ（弟に）ねえ、考えてもごらん！ 女教師が、あの人たちの眼には、ふしだらで、塗りたくった女よりも注意に値いしないのね……（11）

彼女は仕事を愛していない。しかし、愛してはいないにもかかわらず、《教師》としての仕事に就いているということで、それにふさわしい敬意を、感謝を、報酬を受け取ることを期待する。そして期待しただけのものが与えられないとき、人生はむなしく、わびしいものとなり、暗い呪咀によって自分自身の魂をも、周囲の人びとをも（学校の子供たちをも含めて）汚し、無気力な灰色に染め上げてゆく。ゴーリキイは彼女についてこう説明している。「タチャーナは——生きようと欲しているが、その力も勇氣ももたないで、生活とは良くないもの、生きることは無意味だと自分に信じこませています。〈……〉善にも悪にも近づく能力のないところまで、自分をこわしてしまい、嫉妬することもできないし、非難することさえできません。言いわけをいうような調子で皮肉を言います。たいへん不幸です。しかしながら、彼女に対しては、憐憫とか同情というよりはむしろ……何か別の、もっと価値のないもの<sup>(16)</sup>を呼びさますのです。」

タチャーナは、一見したところ、家父長制的な家庭の重苦しい雰囲気の中に閉じこめられ、《父》と《子》の対立その他もろもろの家庭的軋轢に悩まされ、唯一の心の支えとも思った男からは冷たく拒絶されて死を願うという、まさしく生活の犠牲そのものであるようにさえ思われる。だが、彼女の不幸は、生活に対する、人びとに対する彼女の不誠実なかわり合いの当然の帰結でもあるのだ。「わたしは生きたいのよ」と彼女が言うとき、そこからただよってくるのは、一切の社会的関係を超越し、義務を放棄し、しかも他の人びとには彼女への奉仕を要求するという排他的に利己主義的要求である。これは、ピョートルにくらべて、ずっと目立たない、つつましやかな覆いに隠されているにせよ、まぎれもなく本質的にピョートルと同一の《唯一者的

(16) M. Горький. Собр. соч. т. 23, с. 221. 邦訳：前掲書，108 ページ。

自我崇拜」のアナーキズムである。

第一次革命の前夜、小市民イデオロギー、とりわけそのアナーキズム的諸傾向との闘争は、ロシア・プロレタリアートにとって緊急の課題であった。アナーキズムの影響は、急進的左翼主義の中にも、微温的改良主義の中にも影を落としていた。芸術運動の中ではデカダン派の《神秘的アナーキズム》が唱道されていたし、やがて第一次革命敗北の反動期には、ゴリキイのかつての盟友レオニード・アンドレーエフを先頭とする無数のアナーキズム的個人主義の多彩なヴァリエーションの跳梁を見るに至る。早くからこの思想潮流の労働運動への有害な影響を重視していたレーニンは、1901年、「無政府主義と社会主義」と題する論文の執筆を予定し、そのプランを書きのこしているが、そこではアナーキズムの理論的諸欠陥を挙げながら、その本質を「アナーキズム——裏返し(17)のブルジョア個人主義。アナーキズムの世界観全体の基礎としての個人主義」と規定していた。1905年に《ノーヴァヤ・ジーズニ》に発表された一連の論文の中で、レーニンのこの見解は、当面の諸課題との関連においてさらに具体的に展開されるのであるが、たとえば『党の組織と党の文献』では、ブルジョア・インテリゲンツィヤの《旦那衆のアナーキズム》、《超人文学者》の《ブルジョア的無政府個人主義》、ブルジョア体制の諸条件のもとでの個性の《絶対的自由》を批判しつつ、レーニンは次のように述べた。「……ブルジョア個人主義者諸君よ、われわれは諸君に言わなければならない、絶対的自由についての君たちの言辞はたんなる偽善にすぎないと。金力のうえにたてられた社会に、勤労大衆が貧窮し、一握りの金持が寄生している社会に、真の、現実の《自由》はありえない。」「そもそもこの絶対的自由は、ブルジョア的もしくは無政府主義的な空文句ではないか(18)（というのは、世界観としての無政府主義は裏返しにしたブルジョア性だから）。社会で生活しながら社会から自由であることはできない。」

(17) В. И. Ленин. Полное собрание сочинений. Изд. 5. М., 1967, т. 12, с. 131.

(18) Там же. т. 12, с. 103, 104.

ゴーリキイは、戯曲『小市民』において、《小市民性》の本質を明らかにしながら、とりわけ時代の緊急の課題として、《無政府主義的な空文句》がいかにかブルジョアないし小市民インテリゲンツィヤの思想的武器として役立つかを芸術的に提示し、これとの闘いの必要性を強調したのであった。

次の機会では、ゴーリキイの劇作の手法の検討が課題とされよう。